

# 特集 社会科学の実証的方法論：

## データと統計分析の観点から

### 序

石原章史\*

社会科学は様々な方法論を用いて研究が進展してきたが、とりわけ最近発展著しいのがデータの適切な処理を通じた実証的なアプローチである。近年の情報技術は、様々な事実のデータ化やそのデータの処理を可能にした。適切なデータ処理を行うための統計的な手法や数理的モデルも目覚ましい進歩を遂げており、社会科学の研究者達にとってデータ分析が容易な環境になってきている。

本特集では、社会科学の諸分野でのデータを用いた実証分析について近年の動向や発展を概観する。法学・歴史学・社会学・経済学の各分野における問題意識やデータ化、統計処理、数理モデル化の課題などを議論するとともに、これらの問題の共有を深めていくことを目指す。実証方法論は統計学をはじめとした様々な異分野の知見との融合を経て発展してきた経緯があり、本特集は社会科学の分野間での実証研究の知見の共有を促し、分野横断的な考察や社会科学の総合的な視点の拡充を新たに目指すことを期待するものである。本特集は以下の4本の論文から構成される。

前半の2本の論文は法学および経済史の各分野における実証・計量分析の発展の背景とアプローチを俯瞰するものとなっている。飯田高「法の構造と計量分析」は法学における計量分析の「法の構造」という問題意識、データの詳細、分析手法を概観している。「法の構造」とは法の存在の仕方という意味であり、法そのものがどのように存在してきたかを時間的および空間的な比較の観点から解明することが法学の目的意識の1つとして存在する。論文内では法情報のデータ化やコンピューター上の分析手法などの近年の事情が解説されているとともに、法の構造として法の一貫性やネットワーク化を定量的に分析した研究が紹介されている。

---

\* 東京大学社会科学研究所。E-mail: akishihara@iss.u-tokyo.ac.jp

中村尚史・高島正憲・中林真幸「実証的経済史研究の現在」は経済史における実証的研究方法の発展と近年の実証研究を俯瞰している。経済史の研究は歴史学に基づく発展と経済学に基づく発展があり、論文の序盤ではその様々な発展経路と経済史研究のアプローチ方法を解説している。後半では経済史での近年新しい実証研究として注目されている超長期 GDP 推計とオーラル・ヒストリーが紹介されている。

後半の2本の論文は統計分析手法が比較的確立している社会学・経済学における推計モデルの諸問題について議論されている。大久保将貴「パネルデータ分析における固定効果モデルの取扱説明書」は因果効果の識別のためにパネルデータを用いて固定効果モデルを分析する際の取り扱い方とその解釈を説明している。因果効果の統計的な推定のための代表的モデルの一つとして複数の個体を複数の時点に渡って観察したパネルデータを用いた固定効果モデルが広く普及しているものの、因果効果を識別するための仮定の議論はあまり注意深く行われていない。論文では、パネルデータを用いた固定効果モデルにより因果効果を推定する際の識別仮定および推定値の解釈について注意深く議論している。

菊地雄太・今井晋・鈴木広人「近年の生産関数推定法の概観」は経済学の分析において重要な要因の1つである生産関数の推定について、近年の推定モデルの発展を解説している。生産活動は生産性が観察された後に各投入財を決定すると想定されるが、生産性はデータとして観察されず、また生産性と投入財の間に相関が存在することで、推計上の内生性の問題が生じることになる。論文では、この生産性から生じる推計上の問題に取り組んできた近年の推計モデルを紹介し、その利点と限界を説明している。